キリスト教は「生」と「死」をどう教えているのか
――日本社会における「死への準備教育」を考える――

李　　光　　赫

要　旨

本稿は、人間の「生」と「死」の二つの出会いの次元をキリスト教の信仰に基づいてその位置付けを改めて確認する研究である。現代の日本の超高齢社会に生きる我々の置かれている状況のなかで、どのように「死」の問題を意識し、そこでどのような「生」の問題を見出したら良いのかを考える。また、現代神学者 F.X. デュルウェル（F.X.Durrwell）のキリスト者として「キリストと共に死に、キリストと共に生きる」について解釈する。さらに、日本における「死への準備教育」は可能なのかについて「死生学（Thanatolog）」の視点から探りながら、キリスト者として「終活」と呼ばれている死を全うする心構えを養うことを目的とする。

キーワード：キリスト教における生と死、死生学、終活、死への準備教育

1. はじめに

現在、死に対する教育は、日本人の教育レベルがかなり高いにもかかわらず、まだほとんど実施されていない。そこで、本稿は今日の課題である死の教育、終活について、キリスト教信仰を軸にして学際的検討をしたい。このような「生」と「死」に対する問題は、人間の自由と責任を積極的に強調するキリスト教倫理でもある。

古来「死」に対する考察は、人類思想史の中心的なテーマであった。特に、欧州では死生学（Thanatolog）の研究が盛んになった。死生学とは、ギリシャ語の thanatos（死）と logos（学問）の合成語で、一般的に「死」と「死への過程」の諸問題を学際的に扱う分野を指す。死生学は肉体的な延命だけでなく、人間としての総体的な延命のあり方を模索する哲学的な思索が原点となる。死生学の研究は、スイス生まれの精神科医 E・キューブラー・ロスの、米国における臨死患者の心理を研究した『死ぬ瞬間』などの一連の著作の発表を契機として、1970 年代から飛躍的な進歩をとげた。[1]

なお、近年、日本の超高齢社会における「終活」への関心とともに、個人の最期についての希

望や家族に言い遺しておきたい「エンディング活動」などが注目されている。それに加えて、自分の人生の最期の締めくくりを、他人任せではなく納得のいくように備えていきたいと考える人が増えている。また、葬儀においても、地方ごとの慣習や時代の慣例によって変化し、スタイルもいろいろあるが、キリスト者にとっては、地上での信仰生涯において最後の礼拝の場でもある。

本研究では、人の「生」と「死」について、キリスト教はどう教えているのかを紹介するが、まずはキリスト教における「生」の意味とキリスト教における「死」の意味について、それからF.X. デュルウェルが言う「キリストと共に死に、キリストと共に生きる」という意味について調べる。最後には、仏教式葬儀の多い日本という異教社会にあって、日本における「死」への準備教育は可能なのか、キリスト者らしい「生」と「死」への心得とはどのようなものなのかについて述べたい。

2. キリスト教における「生」の意味とは

生命とは、生物が共通して持っているものであると一応言うことができるが、単に、生物学的な観察の対象としての一つの現象ではない。たとえその現象を分析することはできるとしても。ある意味では、全宇宙は生きており、太陽も石も生きていると言うことができるのである。またウイルスのように、生きものか生きものではないかの明確な境界線を引くことのできないものもある。生命の意味とその理解は個的及び社会的な（時間的・空間的）諸段階・諸領域において多様である。[2]

キリスト者であり元聖路加国際病院理事長・名誉院長の日野原氏は、彼のエッセイ集で次のように言う。『いのちとは、「あなたが使える時間」のことである。たとえ目には見えなくても、私たちは、風を感じ、風を知ることができます。フランスの作家で、空を飛び続けた飛行士でもあったサン・テグジュペリは、彼の「星の王子さま」の中で、友だちになったキツネが、星に帰る王子さまに言っていましたね。「本当のものは、目には見えないものだよ」と。こころで見なくちゃ、肝心なものは見えないと彼は言っています。』[3]

また、聖書もこう教える。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」（コリントの信徒への手紙二 4 章 18 節）、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」（ヨブ記 1 章 21 節）このように、キリスト者たちは目の見えない「いのち」というものが神から授かった賜物であることを信じている。そして、一人一人の「いのち」は神の支配の内にあるとともに、有限であり、創造主の栄光のために供えられたものであることを知っている。だからこそ神の前において、自分の「いのち」、自分の「生」というもの

を私物化したり、絶対化することは許さない。

そもそもキリスト者（クリスチャン）とは、「キリストと共に生きる」という意味を持つ。聖書ガラテヤの信徒への手紙 2 章 20 節では「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」とある。この「キリストがわたしの内に生きておられる」という表現は、それ自体では、キリストと共に、同じ場所にいるということしか暗示しない。しかし、キリストは、もはや空間の法則に支配されていない。死にゆく人もまたその地上の体を離れる時、空間の法則から解放されるからである。「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」ローマの信徒への手紙 14 章 8 節。つまり、私たちの「生」が「キリストと共に生きる」という関係性のものであるならば、私たちの「死」も「キリストと共に死ぬ」という関係性があるという意味である。

このような、キリスト教の人間観は、ギリシャ的な二元的人間観に対して、旧約のヘブライ的な一元的人間観に根ざしつつ、そのような二元論的人間観をどのように克服するかということは避けて通ることができない焦眉の問題であった。なかでもパウロが、思想的に対決せざるを得なかったのは、ギリシャ的思想、わけてもグノーシス主義的人間観であった。[4]

パウロは、同時代の環境（ヘレニズムーユダヤ教的神学の潮流）の存在論的―二元論的な原形を、十字架と復活によって特徴付けられるキリスト論的な水準へと移調している。律法と知恵、および「ノモス」と「ロゴス」へ向かう代わりに、古い世界と新しい創造とが互いに浸透しあう場所としてのキリストの出来事へと向かう。どちらの場合でも「知恵の新しい方法」に到達しているのであり、その方法においては、もはや実体ではなく、「関係」が基準となっているのである。[5]

このように、キリスト者にとっては何はともあれ、「生」も「死」も、当たり前のことでありながら、「神のもの」という答えを出してしまいがちであるが、聖書は、「キリストとの関係性」を強調している。神ご自身が「いのち」であり、その「いのち」は「あなたがたのもの」だと紹介している。つまり、「神」は「私たちのもの」であり、私たちの「いのち」も「キリストと共に生きる」関係性のものである。したがって、「生」も「死」も私たちのものであるからこそ責任ある自己決定に深い意味が出てくる。そして、自己決定が可能となるのである。

私たち自身は、実はキリストのもの、そして「キリストは神のもの」という具合に、私たちがキリストと神とに包まれた存在としてあることが、聖書の同じ聖句の中で明らかにされている。「かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいることが、あなたがたに分かる。」（ヨハネによる福音書 14 章 20 節）[6]

3. キリスト教における「死」の意味とは

人は死に定められた存在である。人生を終えることになる死を、ただ「不思議な経験」として受け入れている人が多い。しかし、死とは最も実在的な、最も人格的な人間の現実である。そのように厳密に人格的な現実について、事情を弁えて話すことなど難しい。それもそのはず、死んだ経験がないし、死んでしまえば、もう死について語ることができない。

日本で一般的に行われている習慣としての葬儀での供養は、先祖崇拝を基盤とした民間信仰の影響を受け、故人の冥福を祈念して営まれる法要のイメージが定着している。聖書には、故人の冥福を祈ったり、死者の霊を慰めたりする教えは見られない。「先祖」には度々言及されてはいるが、先祖が礼拝の対象とされたり、死者に対する祭儀が行われたりした記録はない。「先祖の神」という表現が示すように、過去に与えられた神との契約を再確認したり、出エジプトの故事などのように神が先祖たちにされた御業や恵みを想起したりする記念行事が行われた。キリスト教の伝統でも記念会はあるが、英語で「メモリアルサービス（Memorial service)」と表現されるように、葬儀同様その趣旨は神への礼拝である。故人のことを思い起こすと共に、故人を通してなされた神の恵みを覚えている。

それでは、聖書は「死」についてどう教えているかもっと詳しく調べてみる。

ティム・ラヘイは彼の著書「死後、何が起こるか」で次のように述べている。

『旧約聖書は死者の世界を「シェオール」として65回言及している。その語は「墓」あるいは「死」と訳してもよい。…（省略）「シェオール」はこの世を去ったすべての者の行く場所である。この死者の世界をあらわす新約聖書の用語は「ハデス」である。（42回用いられている。）「シェオール」も「ハデス」も、英欽定訳聖書が訳しているように「地獄」ではないことに注意していただきたい。ヘブル語の「シェオール」もギリシャ語の「ハデス」も、同じ一時的な場所を指している。ところが「地獄」は、永遠に続く永続的な場所なのである。』[7]

新約聖書では、生命が肉体の死をもって終わらないということでは、旧約聖書の価値観をもつユダヤ教と一致している。しかし、新約聖書では、「生命」は、終末論的な性格を持っているのである。「…恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。」（ヨハネの黙示録1章 17、18節）

また、終わりの時（終わりの時とは、神の救いが現実のものとなる時のことである）に、生命そのものであり、生命を与えるイエス・キリストが到来したという言葉が、さらにそのことを端

的に物語っている。「…わたしは道であり、真理であり、命である。」（ヨハネによる福音書 14 章 6 節）、「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」（同書 10 章 10 節）

したがって、新約聖書では、単に、肉体的、生物学的に生きていることが、真の生命であるとは考えない。ただそれだけのことであれば、「生きているというのは名だけで、実は死んでいる」（ヨハネの黙示録 3 章 1 節）のである。[8]

キリスト者は信仰の目をもって、見えるものの向こうにあるものを見ている。新たに生きる意味を聖書は示している。本当のキリスト者であれば、死について恐れることはないはずである。なぜなら、死がその外観とは違ったものであることを知っており、死ではなく、復活こそが人間の最後の言葉であることを、キリスト者は確信しているからである。

新約聖書に「わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。」（ヨハネによる福音書 10 章 17 節）とある。それから続いて、『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る。』（同書 14 章 28 節）とある。イエスはこの他にもいろいろな言葉でご自分の死の意味を公に明らかにしている。だからこそ、キリスト者には死について語る義務がある。

フランスの現代カトリック神学者 F.X. デュルウェル（F.X.Durrwell、以下、デュルウェル）は、次のように主張している。

キリスト者は「死の鍵」（ヨハネの黙示録 1 章 18 節）を持っているお方が、正しい方向に鍵を回してくださったことを信じている。イエスが死んだとき、死は突然その様相を変えた。「お前は必ず死ぬ」（創世記 2 章 17 節）という、かつての呪いが、「わたしたちも、先祖に与えられた約束について、あなたがたに福音を告げ知らせています。」（使徒言行録 13 章 32 節）、「…死は勝利にのみ込まれた。」（コリントの信徒への手紙一 15 章 54 節）という良い知らせに変わった。[9]

このように、キリスト者も死に定められた存在であるし、死について語るためには、確かに死を体験しなければならない。しかし、死は勝利にのみ込まれたため、キリスト者は死を一つの恵みとして自分らの内側に宿していると、デュルウェルは言う。

次の聖句は、この点についてはっきりと示している。「イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」（ヨハネによる福音書 11 章 25 節）。さらに、彼はこう言う。

『正しくキリスト者は、今から死ぬことになる死を生きることができる。人がキリスト者となるのは、キリストとの死の交わりを通してである。「それともあなたがたは知らないのですか。

キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。」（ローマの信徒への手紙 6 章 3 節）。　キリストとの死の交わりを通してキリスト者たちとなった私たちは、キリストと「共に死ぬ」ことを成し遂げるとき、完全にキリスト者となる。この「キリストと共なる死」は今すでに私たちの内側に宿っている。「兄弟たち、わたしたちの主キリスト・イエスに結ばれてわたしが持つ、あなたがたに対する誇りにかけて言えば、わたしは日々死んでいます。」（コリントの信徒への手紙一 15 章 3 節）。その静かな死は私たちのうちに宿り、私たちの生き方に意味を与えている。』[10]

このように、「死」における確実な約束が聖書から数多く与えられている。そのため、キリスト者たちは、はっきりと死について語ることができる。しかしながら、いたずらに死を美化してはならない。美しいと呼ばれるような死はほとんどない。死にゆくキリストがまず、涙と血を流し、暗闇の中で、悲痛な叫びをあげたことを忘れてはならない。

4. 「キリストと共に死に、キリストと共に生きる」とは

使徒パウロは、キリスト教の信仰告白の儀礼である洗礼を、「キリストと共に死に」、「キリストと共に生きる」と表現した。「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。」（ローマの信徒への手紙 6 章 3 節）。

ここでも「生と死の関係性」を強調しているのである。「キリストと共に死ぬ」ことを通して「キリストのうちにいる」ことを可能にするという認識である。「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」（同書 6 章 4 節）。つまり、キリスト教における洗礼儀式には、信仰を告白する者がキリストに結び付けて、十字架の死と復活のキリストの体と一致させる意味を持っている。

このようなキリスト者の全生涯はキリストとの同じ歩みの分かち合いである。「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。」（コリントの信徒への手紙二 4 章 10 節）。この交わりにおいて、イエスは永遠の聖所へと通じる道になると教える。「わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通って、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです。」（ヘブライ人への手紙 10 章 19、20 節）。

では、人は、人間イエスの死の中で死ぬことができるのか。デュルウェルは続けてこう述べる。

死後の世界は、キリスト者の最も内的なものにおいて、つまりキリスト者の死において受け取ることができるようになる。したがって、イエスの栄光化された死は実質的に経済的である。なぜなら私たちがそれにあずかることができるからである。ここで「イエスは私たちのために死なれた」という言葉は、十全の心理となる。なぜならイエス個人のものである死、その中にあって御父から命を受け取る死が私たちのものとなり、同様に、キリストの命も私たちのものとなるからである。パウロはこれを「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」（ガラテヤの信徒への手紙 2 章 20 節）と言っている。[11]

使徒がこの世を去ることを欲するのは、この世では流謫の身であると感じるからである。「わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。」（コリントの信徒への手紙二 5 章 6 節）。主ご自身が私たちの家であり、私たちはしを通してそこに入り、いつまでもそこに留まる。「自分の命を憎む（死を受け入れる）者は命を保つのである。そして私のいるところに私に仕える者もいることになる」（ヨハネによる福音書 12 章 25 節以下）とイエスは約束された。

「キリストと共に死に、キリストと共に生きる」ということについては、新約聖書のテモテへの手紙二 2 章 11 節ではっきりと示している。（次の言葉は真実です。「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きるようになる。」）

この相互の内在化には同じ一つの死の分かち合いが伴う。この地上ですでに、1 つの死の交わりにおいて、キリスト者はキリストのうちに生き、キリストはキリスト者のうちに生きておられる。

これに関してデュルウェルは、聖句「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（ヨハネによる福音書 12 章 24 節）を引用して、次のように紹介している。[12]

> 信者は、キリストと同じ死のうちに、キリストと共に死にます。このように、キリストの贖罪の死の中に引き込まれて死ぬことによって、彼は救われると同時に、キリストのように世の救いの神秘に参与する。
>
> ＜省略＞…　すでにこの地上で、キリスト者は、キリストの死との交わりにおいて実を結ぶことができた。「こうして私たちのうちには死が働き、あなた方のうちには命が働いている」（二コリ 4・12）。しかし今、彼はキリストとの十全な死の交わりの中に入ります。

このデュルウェルの紹介された「すでにこの地上で、キリスト者は、キリストの死との交わり

において実を結ぶことができた。」という言及がとても印象的である。キリスト者において「死」より懸念しなければならないのが「絶望」であることを再び想起させる。デンマークの哲学者であるセーレン・オービエ・キェルケゴール（Søren Aabye Kierkegaard）は、キリスト者において「絶望」とは「罪」であると次のように述べている。

罪とは、神の前で、または神の観念をもちながら。絶望的に自分自身であろうと欲しないこと、もしくは絶望的に自分自身であろうと欲することである。したがって、罪は度の高まった＜弱さ＞、または度の高まった＜反抗＞であり、畢竟、罪は、絶望の度の高まったものなのである。重点がおかれているのは、神の前でということであり、あるいは、＜神の観念＞がそこに共にあるということである。そして、罪を弁証法的に、倫理的に、宗教的に、法律家のいわゆる「情状加重の」絶望たらしめるものが、この＜神の観念＞なのである。[13]

キリスト教の信仰とは、死に打ち勝った希望の信仰ありリアルである。その希望は、望みであると同時に、確信である。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」（ヘブライ人への手紙 11 章 1 節）

信仰と愛によって信者はキリストに結ばれる。死後の本国はすでに天にある。この御国への最初の入国は、御国に属するものとなるという望みを目覚めさせ、そこに到達できるという確信を与える。キリスト者とは望みの人のことである。

死に直面してキリスト者が不安を抱かないわけではない。人は自分の弱さを知っている。そして誘惑がどれほど恐ろしいものになりうるか、時には信仰を失わせ、時には絶望に陥れ、神に背く危険となるかも知っている。しかし、そうした危険の前にキリスト者は自分の弱さを喜ぶことができる。それは父である神が、自分のうちに始められは業を力強く完成してくださるということ、そしてその力は弱さのうちに発揮されるということを確信しているからである。

5. 日本における「死」への準備教育は可能なのか。

死生学における実践段階が「死」への準備教育である。欧州ではすでに教育の場に広く取り入れられている。人生全体の意義は、死によって完成されるものであるから、「死」への準備教育（デス・エデュケーション）はそのまま、より良く生きるための教育にほかならないとも言える。

日本にホスピスケアの思想が紹介されるようになったのは、1970 年代前半のことである。その当時の背景として、医療現場において医師と患者の関係が少しずつ変化してきたことがあげられる。すべての国民が安価で高度な医療を受けられるようになった反面、いわゆる検査漬け、薬漬けの医療に対する批判が起こるとともに、患者と医師の信頼関係が揺らぎだした。[14]

超高齢化社会の現代の日本は、いろいろな種類の高齢者施設が増えているが、自分から進んで介護施設に入る人は多くない。ご家族にとっても介護が難しくなったから入所させるわけで、内

心忸怩たる思いがあるのは当然かもしれない。これからは何の準備もせずに死に臨むのではなく、人生の各段階で必要な「死」への準備教育を受けて自分自身の死を全うする心構えを養うべきである。

死への準備教育として取り上げるテーマは広範囲におよぶが、以下、特に重要と思われる15の目標について、アルフォンス・デーケンは次のように述べている。[15]

1、死へのプロセスならびに死に直面する患者の抱える多様な問題とニーズを理解する。これによって私たちは、人生最後の段階にある患者に対して、よりよい援助を提供できるようになる。キューブラー・ロスが提唱する死へのプロセスの五段階説「否認→怒り→取り引き→抑鬱→受容」に、筆者はキリスト教徒としての立場から、死後の生命に対する期待と希望の段階を付け加えたいと考える。

2、生涯を通じて、かけがえのない自分だけの死を全うできるように、死について、より深い思案をめぐらす。

3、悲嘆教育（grief education）必要性を認識し、悲嘆のプロセスへの理解をうながす。著者の分析による悲嘆のプロセスの一二段階を理解し、立ち直るまでの周囲の適切な援助方法など知ることは、予防医学の観点からも重要である。

4、死への極端な恐怖を和らげ、心理的な負担を軽減する。死への恐怖は、生物体としての自然な現象であるが、過剰な恐怖はノーマルなレベルルまで緩和することが望ましい。医療関係者たちが自分の抱く死への恐怖に冷静に対処できるように、筆者は死への恐怖と不安を九つに分類して参考に供している。

5、死にまつわるタブーを取り除くことをめざす。死のタブー化は人間同士の率直な対話とコミュニケーションを妨げ、創造性を奪う行為と言えよう。

6、自殺をはかる人の心理への理解を深め、その予防方法などを教える。

7、病名の告知と末期患者の知る権利についての認識を徹底させる。真の病状を伝えることは、末期患者とその家族や医療関係者との間に、真実を土台としたコミュニケーションを築くための前提となる。もちろん、患者には知ることを拒む権利もある。真実を告げるには、患者の精神状態に対する配慮が必要であり、そのアフター・ケアにはさらに細心の心遣いがなければならない。

8、死と死へのプロセスをめぐる倫理的な問題の認識をうながす。例えば、人工的な延命治療をどこまで行うか、消極的・積極的安楽死への見解などを、健康なうちから家族間で論議しておくように心がけたい。

9、医療と法律に関わる諸問題への理解を深める。例えば、死の定義と判定・脳死・臓器移植・献体・遺言の作成・死後の家族援助などについても十分な教育が望まれる。

10、葬儀の役割の重要性を理解し、自身の葬儀方法をあらかじめ選択し準備するための助けとする。形式的・商業的な葬儀ではなく、故人の人間性を反映した葬儀が望ましく、そのためには、元気な間に自分の意志を家族によく伝えておくことが必要であろう。

11、時間の貴重さを発見し、人間の創造的次元を刺激して、価値観の見直しと再評価をうながす。生命の有限性を自覚することによって、それまで気づかなかった潜在的能力を発揮し、より創造的な生き方を実現できたという例は枚挙に暇がない。

12、死の芸術（アルス・モリエンディ）を積極的に習得させ、第三の人生の充実を図る。かつて死は、時間をかけて磨き上げるべき芸術と見なされていた。よりよい死を迎えるための準備は、現在の生をよりよく生きようとする努力にも通じる。いかに長く生きるかという生命の量だけではなく、クォリティ・オブ・ライフ（QOL・生命や生活の質）の改善にも目を向けて、その人らしい日々を過ごせるように援助したい。

13、個人的な死の哲学を探究し、各人が社会的・心理的・イデオロギー的固定観念から解放された自由な死への理解を深められるように援助する。

14、宗教における死のさまざまな解釈を探り、自身の死生観を省察する。各宗教における死生観の解釈の相違を理解し、あくまでも自身の自立した死の意義の探究を行う。

15、死後の生命の可能性について積極的に考察するようにうながす。現時点では、死後の生命の存在を科学的に証明することは不可能であるが、また死ですべてが終わるとも証明されていない。死を新たな生への入口と考えるならば、人生のあらゆる労苦も決して無駄にはならない。死後の生命を信じるのは、現在の生に意義を見いだすことでもある。

以上の15の目標を掲げて、キリスト教の信仰によって教育が施されている学校や教会関連施設などが「死への準備教育」の実践に踏み出していかなければならない。特に、日本のキリスト教主義の学校は、死に関する好奇心や興味から発する生徒たちの質問に対して、真剣に向き合うべきである。アメリカやカナダの小・中学校では、数十年以上前からいろいろな教材のなかでデス・エデュケーションを扱い、多角的に考えているところが多い。ドイツの国・公立学校では、小学校から高校まで毎週2時間の宗教の時間の枠内で一貫して行っている。韓国の場合は、数多い教会学校がこのような活動を担っている。この様な教育は子どもの成長に応じて、死について哲学、医学、心理学、文学、宗教など多面的に考察させ、生徒の自立した死生観の確率を目指している。とりわけ、日本の超高齢社会におけるこれまでの医療は、患者とその家族を中心に据えたこころ温かな人間的交流の場であってほしい。そのために医学・看護学教育には「死への準備教育」を定期的な研修会を継続しながら、死に対する成熟した態度を身につけることが望まれる。

6. 終わりに

以上、キリスト者における死生観では、いのちとはこの地上で神から与えられた限りのあるものであり、死は終わりではなく、キリストと共に生きる通過点であると考える。それこそが、キリストと共に死に、キリストと共に生きることである。そして、神の用意している素晴らしい御国に移されることである。

今日の日本は、人がこの世を去る時にこのまま何もしなくてよいのかを、もっと真剣に向き合って考えるべきである。この地上を去る準備、神が与えてくれた残りの生活の整理など「死への準備教育」は、より良く生きるための終活であるからである。今後も、このような終活における研究や教育などは尊重されるべきであり、決して正当な理由なくして人のいのちを奪われたり、変質されたり、放置されたりしてはならない。なぜなら、「生」と「死」は神だけがそれへの全き支配権を有しているからであると同時に、生死問題について、責任のある生き方と責任のある終活を委任し分け与えているからである。したがって、人生100年時代を迎えた今日の日本社会において、キリスト教は終活として目指すべきものを提示していかなければならない。また、現代を生きる介護概念についても研究していかなければならない。一般的に高齢者は弱者という見方がされているが、多くの人がより良い第二の人生であるセカンドライフを送れるように、様々なサービスを考案し提供することが今後の研究課題であろう。今までの一般的な介護は、身体ケアに限られている認識が多かったが、キリスト教における死生学の観点から、心身共に（或は、霊的に）ケアできる「死への準備教育」と「新しい介護概念」を引き続き研究し、正しく伝えていかなければならないと強く感じている。

参考・引用文献

1 神田健次（編）1999. 生と死.「講座」現代キリスト教倫理１「日本基督教教団出版局」pp. 193-194.

2 秋山　徹　外　1993. 老い・病・死―教会の現代的課題.「日本基督教教団出版局」p. 46.

3 日野原重明　2012. いのちのメッセージ「三笠書房」P. 21

4 神田健次（編）1999. 生と死. p. 20.

5 宮谷宣史（編）1994. 死の意味―キリスト教の視点から「新教出版社」p. 82

6 本稿の聖句引用は、すべて「新共同訳」聖書を使用する。

7 ティム・ラヘイ（訳者：松代幸太郎）1987. 死後、何が起こるか「いのちのことば社」pp. 39-40

8 東方敬信（編）1993. キリスト教と生命倫理 「日本基督教団出版局」p. 67

9 F.X. デュルウェル 2005. キリスト・人間と死　p. 14

10 F.X. デュルウェル 2005. キリスト・人間と死　p. 18

11 F.X. デュルウェル 2005. キリスト・人間と死　pp. 63-64

12　F.X. デュルウェル 2005. キリスト・人間と死　pp. 96-101
13　セーレン・キルケゴール 1982.（訳者：飯島宗亨）死にいたる病「教文館」p. 114
14　神田健次（編）1999. 生と死. p. 181.
15　アルフォンス・デーケン 1999.「コラム、死への準備教育（death education)」（講座）現代キリスト教倫理１　現代キリスト教倫理１「日本基督教教団出版局」pp. 195-198.